

「満洲国」内における電話の一考察 ——日向伸夫『第八号転轍器』、牛島春子『福寿草』から——

黒田翔大
(名古屋大学大学院人文学研究科/博士研究員)

1. はじめに.

「満洲国」(以下、括弧を略す、また「満洲」、「満人」、「満系」も同様)は、1932年3月1日に中国の東北部において成立し1945年8月18日まで続いた。満洲国には五族協和や民族協和といったスローガンがあるように、主に五つの民族で構成されていた。日本民族、漢民族、満洲民族、朝鮮民族、モンゴル民族の五族であり、他にも少数民族が存在した¹。これらの民族を協和という名の下に、日本人を最も優れていると位置付け、他民族の差別や民族間を分断させるといった政策を行った²。満洲国は国家という形を装っているが、その内実は日本の植民地統治の一形態である傀儡国家であった。

その満洲国において1933年に満洲電信電話株式会社(以下、満洲電電)が設立される。満洲電電は日本と満洲国による合弁の国策会社であるが、その設立目的は1943年に刊行された『電電の十年』において次のように述べられている。

満洲事変を契機として満洲の地に新しい政治態勢が齎され、民族協和と日満一徳一心を理想とする王道満洲国の独立宣言が発せられ、日満議定書の協定となり、従来の対峙的關係は解消して日満両国は国防、政治、経済、文化等あらゆる方面に於て緊密不可分の關係を形成することとなつた。而して新生満洲国はその建国の理想に則り、親邦日本の協力援助の下に、先づ国防、治安の確立、政治行政機構の整備と産業經濟の開發に邁進することとなつたのであるが、これがためには国家社會の神經系統たる電氣通信事業を速かに整備充実にせしめるといふことが不可欠の前提条件であつた³。

当初満洲国では電信電話事業が乱立しており、異なる事業体への接続は不完全という雑然としたものであった。この状態では迅速な通信を行うためには支障が大きいので、満洲電電は電信電話網の統合を進めていくことになる。

満洲電電に関する研究として、疋田康之は設備投資などから満洲電電の普及規模に言及し⁴、楊大慶は逡信省の中国に対する関与において満洲電電に部分的に触れ⁵、石川研は満洲電電の業務や収益に関して論じているが⁶、いずれも具体的なメディア利用に関しては不十分だといえる。白戸健一郎は満洲電電を直接的に扱い、そのメディア利用の実態を論じているものの⁷、電話に関しては満洲国と日本との間のものが主となっており、満洲国内における電話の利用に関しては十分といえない。

そこで本稿は、満洲文学である日向伸夫『第八号転轍器』と牛島春子『福寿草』において、異民族間の問題がどのように描かれているのかを通して、ささやかながら電話がどのように機能し得ているのかの一端を明らかにすることを目的とする。それによって、両作家の電

¹ 川村湊『満洲国』現代書館、2011年、p.6。

² 植民地文化学会、中国東北淪陥14年史総編室(編)『「満洲国」とは何だったのか』小学館、2008年、pp.226-227。

³ 島田清(編)『電電の十年』満洲電信電話株式会社、1943年、p.9。

⁴ 疋田康行「日本の対中国電氣通信事業投資について——満洲事変期を中心に」(『立教経済学研究』1988年3月)。

⁵ 楊大慶「戦時日本の対華電氣通信支配」(『軍事史学』1997年12月)。

⁶ 石川研「満洲国放送事業の展開——放送広告業務を中心に」(『歴史と経済』2004年10月)。

⁷ 白戸健一郎『満洲電信電話株式会社——そのメディア史的研究』創元社、2016年。

話に関する描写の意味を探ることにもなる。もちろん他の満洲作家の作品にも電話は登場する。例えば、町原幸二『駱駝のある町』(1940)では旅館へ電話で連絡⁸、百瀬宏『燃える町』(1942)では軍人が状況を本部に電話で報告⁹、小松『十年』(1943)では友人から家に来るよう電話で誘われるといった描写が見られる¹⁰。ただし、いずれも単発的であり作品内において大きく機能するものではない。それに対して、春子や日向の作品の主な舞台となっている満鉄や京城には電話が設置されており比較的電話の重要度も高い¹¹。満洲国における電話の同時代状況を確認した上で、両作家の作品へと順を追っていく。

2. 空間的距離の短縮と言語の差異。

日本と満洲国が電話によって直接的に接続されるというのは大きな出来事であった。それは、直通の国際電話線としては最長のものであり、日本の技術力の高さの証明ともなったからである。

通信省が総工費二千万円を投じ三カ年計画で工を急いでいた大阪奉天間を結ぶ日満電話直通地下大ケーブルは本月二十日頃から愈開通をみることに決定した、新ケーブルは日満間を縦断、延長距離實に二千二百キロに及ぶ我国最初の直通国際電話線でありケーブルとしては現在最長距離といわれているニューヨーク、シカゴ間千六百キロを遙に凌駕、世界一を誇る大通信動脈である¹²。

日本と満洲国は1934年に無線電話が開始されていたが、1938年に大阪—奉天間、1939年に東京—奉天間において日満無装荷ケーブルが完成した¹³。日本と満洲国が電話で接続されることに対して、白戸は次のように述べている。

電話をとおして「声」が「遠い」満洲にまで「つながる」ことは、「距離の喪失」とも言うべき感覚をもたらし、「日本語が通じ声が届く場」という意識を浮上させ、帝国の一環という感覚が強められたであろうという点である。まさに、このような電話をとおした「距離の喪失」という意識とそれに連続する帝国の一環という感覚の強化こそが、満洲電々の電話システムがもたらした経験であり、ここにラジオや電信とは異なるメディア論的性格があったと考えられる¹⁴。

通信技術は支配の拡大のために不可欠な道具であり、ヘッドリクが指摘するように「帝国の手先」¹⁵の役割を担っている。電話は声によってリアルタイムで離れた空間同士を接続し、郵便や電信よりもはるかに伝達が速いメディアである。そのため、電話は日本と満洲国との空間的距離を短縮させ、満洲国が「帝国の一環という感覚の強化」をさせるという働きをしていたのである。

⁸ 町原幸二『駱駝のある町』(浅見淵(編)『日本植民地文学精選集』1巻、ゆまに書房、2000年)。

⁹ 百瀬宏『燃える町』(呂元明、鈴木貞美ほか(監)『藝文』8巻、ゆまに書房、2008年)。

¹⁰ 小松『十年』(呂元明、鈴木貞美ほか(監)『藝文』13巻、ゆまに書房、2008年)。

¹¹ 満洲国には満洲電電の管轄外である専用電話施設があり、満鉄における鉄道用電話や各県の警察用電話がそれに相当する(日本電信電話公社電信電話事業史編集委員会(編)『電信電話事業史』電気通信協会、1959年、p. 394)。本稿で扱う作品の電話は満洲電電の管轄外にあるものの、満洲国内に設置された電話であることに違いはないため、そこから満洲国内における電話の姿を伺うことができると考える。

¹² 『東京朝日新聞』1938年2月8日、朝刊11面。

¹³ 日本電信電話公社東京電気通信局(編)『東京の電話——その五十万加入まで』中巻、電気通信協会、1961年、p. 249、273。

¹⁴ 白戸健一郎「接続する帝国——満洲電信電話株式会社における電話システム」(『京都大学大学院教育学研究科紀要』2013年3月)、pp. 230-231。

¹⁵ D.R.ヘッドリク『帝国の手先——ヨーロッパ膨張と技術』日本経済評論社、1989年。

ただし、電話の接続による日本と満洲国の空間的距離の短縮が生じたとはいえ、実際に電話を利用することは気軽なものではなかった。なぜなら、満洲電電の設立された1933年において日満間の電報は和文7字につき13銭であったのに対し、1934年に開設された日満間無線電話は普通通話1通話につき7円というように高額であったからだ¹⁶。そのため、実際の満洲の電話の利用に関しては、満洲国内におけるものも扱う必要がある。すると、空間的距離の短縮とは異なる問題の存在が伺える。

満洲国内の電話に関しては、日本電信電話公社による事業史『外地海外電気通信史資料』八巻を見ると、「満洲電気通信における機械上の特殊性」として自動交換機の割合が大きかったという特徴が挙げられている。

我が国では現在市内電話の自動化は大体次の基準でやっている。即ち、加入者数2100名以上/これに対し、満洲電々会社は大体次の基準によった。/即ち、加入者数500~600名以上/従って、自動電話方式の普及率は極めて高く、/加入者総数143700名中/自動交換電話加入者数……113700名/手動電話加入者数……30000名/(昭和21年度末現在)/その比は80%/でわが国の比53.6%/(昭和24年度末現在)/と比較すれば、相当の差のあることが了解できると思う。この、事実は満洲国が複合民族国家であったため、言語の差異による電話交換の困難性や、交換手の養成のむずかしいこと等にも原因はあったが、事業経営の面から、その合理化、能率化により人件費の節約が創設費の高価なことをカバー出来るので、結局自動電話の方が経済的となり所謂『電話事業民営』の有利性が実証されたものと言える¹⁷。

満洲国において、自動交換機が日本と比較して発達していることが伺える。これには、言語の問題やそれに伴う電話交換手の養成の困難さがあり、それを考慮すると自動交換機を設置する方が経営的に有利であったからである。それに関して、満洲電電の元社員たちが当時を回顧したものを纏めた『赤い夕陽』において、荒井芳太郎は次のように述べている。

その第一は、交換手の採用難で、なかなか交換手が得られないことであった。交換手の養成は、普通六ヵ月であったが、大連では支那語を修得せしめたので、余分に二ヵ月もかけて、支那語を習わしたのに、在職年数はわずかに平均七ヵ月という状態であった。第二は、外国人が多いことで、支那人はもとより、欧米ソ連人も多いため、日本語だけでは、とうてい間に合わない。この二つの大きな理由があったので、自動交換採用に決定を見たのである¹⁸。

満洲国で電話交換手を務めるためには「日本語だけでは、とうてい間に合わない」というように、日本語以外の言語の能力も求められることになる。例えば、実際に満洲国において電話交換手を経験した池田三千子の回想では、同じく電話交換手を勤めていた友人の「職場は毎日、現地の人ばかりの中において中国語での電話交換の仕事」¹⁹であったと記述されている。このように、日本語以外もできた方が仕事上の都合が良いということになるが、その分電話交換手の養成に手間が掛かってしまうことになる。それにも関わらず早期で退職してしまう者が多いとなると、経営的に不合理となってしまうことは避けられず、自動交換機の設置が望まれることになる。このように、空間的距離の短縮を可能にする電話のメディア的特性とは別に、言語の差異という問題が大きく関わっていることが伺える。

¹⁶ 注7に同じ、p. 66。

¹⁷ 日本電信電話公社(編)『外地海外電気通信史資料』8巻、日本電信電話公社、1956年、pp. 435-436。

¹⁸ 満洲電々追憶記集〔赤い夕陽〕刊行会(編)『赤い夕陽』、「赤い夕陽」刊行会事務局、1965年、p. 49。

¹⁹ 池田三千子『私の青春——新満洲国五百三十日の旅』パレード、2015年、p. 66。

また、同じ声のメディアであり満洲電電による管轄であったラジオ放送ではどうだったのか。それに関して白戸が論じているのを要約すると次のようになる²⁰。ラジオ放送は、日系向けの第一放送と満系向けの第二放送という多言語放送という方式が取られており、両者の放送内容は異なっている。第一放送では、内地中継が約半分を占めており、遠隔地ナショナリズムに繋がっていた。第二放送では「満洲国ナショナリズム」の形成が目指されていたが、実際には「中国文化へのアイデンティティを育むこと」に繋がっていた。

声による電子メディアは強い集団意識を形成する「二次的な声の文化」をもたらしたとオングは指摘しているが²¹、声というのは言語的なものであり、言語が異なれば集団間の分断という作用も働くことになる。満洲国内における声のメディアには言語の差異といった問題が介在してくるのである。もちろん、ラジオはマスメディアであり電話とは位相が異なる。しかし、電話も声のメディアであり、したがってラジオにおけるような言語の差異の問題は生じ得ると考えられる。

3. 日向伸夫『第八号転轍器』

本節では、日向伸夫の作品を扱っていくが、どのような作家であるのか確認していく²²。日向伸夫の本名は高橋貞夫であり、1913年に京都府舞鶴市に生まれる。旧制第三高等学校を中退し、1936年に満洲に渡り、満鉄に入社しハルビン—新京間の双城堡駅に勤める。日向は同人誌『作文』に参加し作品を発表するが、満鉄での経験が小説の材料となっている。満鉄に設置されていた満洲観光連盟の事務局での活動もあったようだが詳しいことは分かっていない²³。1943年に満洲を離れ満鉄東京支社に転勤し、それからは目立った文筆活動は行っていない。その後、日向は兵隊にとられ沖縄で戦死をする。

日向は1939年に『第八号転轍器』を『作文』に発表し、1941年に第1回満洲文話会賞を受賞し、第13回芥川賞の候補作となる。『作文』は1932年に創刊された同人誌であり1942年に終刊する。『作文』は最盛期には2000部発行されており、このような発行部数や刊行年数を誇る同人誌は稀であった²⁴。

『第八号転轍器』では、満鉄に勤務している張徳有が日々解雇される不安を抱きながら仕事をしている姿が描かれている。張は鉄道のポイントを切り替える業務を担当しているが、元々は満鉄ではなく北満鉄道の職員であった。北満鉄道とは東支鉄道の満洲国側からの呼称であり満鉄と競合関係にあった。関東軍は満洲国におけるソ連の勢力を一掃させるために回収を計画し、ソ連側は日本との衝突を避けるために売却を検討し、交渉の末1935年に北満鉄道を譲渡され満鉄の経営となる²⁵。張にとって経営がソ連から満洲国に移行した影響は大きかった。北満鉄道での業務はロシア語だったが、満鉄では日本語へと変わるからである。

今の駅長になつてからは特に日本語が喧しくなつた。すべて何事にもよらず日本語である。日本語本位にやれば、いきほいその必要に迫られて覚えるだろうと言ふ趣旨なのである。それと言ふのもこの駅長が満語が全然出来ない事も一つの原因であつた、—日本人が満語を覚える必要はない、満人が日本語を覚えて呉れるから少しも不自由

²⁰ 注7に同じ、pp. 125-126。

²¹ ウォルター・J.オング『声の文化と文字の文化』藤原書店、2009年、p. 279。

²² 日向伸夫の経歴に関しては、主に黒川創「〈解説〉螺旋のなかの国境」(『〈外地〉の日本語文学選』2巻、新宿書房、1996年)、天野直美「日向伸夫『第八号転轍器』解説」(日向伸夫『第八号転轍器』ゆまに書房、2000年)を参照している。

²³ 西原和海「満鉄旅客課の一断面——作家・日向伸夫を追いつつ」(『彷彿月刊』2003年7月)、pp. 32-33。

²⁴ 葉山英之『満洲文学論』断章』三交社、2011年、pp. 252-253。

²⁵ 加藤聖文『満鉄全史——「国策会社」の全貌』講談社選書メチエ、2006年、pp. 155-156。

はない——と言ふのが駅長の口癖であつた。これは聊か詭弁だとの評もあるが、大勢は不知不識の間にその方向に動いてゐる事は否めなかつた²⁶。

日本語が不得意な張は、満鉄における出世はほとんど不可能であり、さらにいつ解雇されるか分からない不安な日々を送ることになる。さらに「今の駅長になってからは特に日本語が喧しくなった」というように、日本語の必需性はさらに高まっていく。それは「殊に最近日満不可分関係が強調されて、小学校、中学校が挙って日本語を正科に加へ」たというように、1937年から1938年にかけて日本語が満洲国の正式な国語となった影響によるものである²⁷。満人は日本語が上手であれば重用されるため、日本語の学習を行う者が増えていく²⁸。日本語のできない張に対して、「日本語の出来る満人はどんどん破格に昇進して行つた」とあるように、日本語を習得することによって就職上有利であつた。支配者の言語である日本語を押し付けられるが、日本語の習得が難しい者にとっては非常に困難な状況に陥る。川村湊は『第八号転轍器』に関して次のように述べている。

満鉄の奉天鉄道総局営業局の旅客課に勤務していたという日向伸夫(後、沖繩戦で戦死した)は、満鉄人の多い職場で、彼らと日常的に交流しながら満州人の登場する小説を書いていた。そのために彼は文化や言語やシステムの違いを相対化して考えることができたし、そのシステムの違いが個人的な身上においてどれほど破壊的な作用を及ぼしうるかということに気がついていたといえるだろう²⁹。

満洲国には異なる言語や文化を持つ民族が存在している。しかし、支配者である日本人に優位性があり、言語面では日本語が優位ということになる。このことが、満洲で暮らす日本人以外の者に対して与える影響は計り知れないであろう。他にも日向の満人の描き方に関して、天野直美は「満鉄で働き、異民族の従業員と接していた日向にとって、異民族の視点を通して植民地「満洲」を描く手法は必然的」³⁰、魏舒林は「植民地という特殊な場所にあつて〈獲得された〉視点」³¹であると述べているが、日向の作品は満鉄での経験が大きく影響しており、被支配者である満人の状況に目が向いている。それでは、『第八号転轍器』において満系である張の視点から言語の違いがどのように描かれているのだろうか。

既に確認したように、日本語の不得意な張は、満鉄での出世はほとんど不可能であつた。「朝の点呼の運転達示や注意」などあらゆる事が日本語本位で行われるようになっていくことで業務の困難さは増していく。張は日本語の習得をしようとしていないわけではなく、勉強をしてもなかなか上達することができない。それに対して、王や趙などは日本語が上手であり、それと比較すると惨めな気持ちにならざるを得ない。また、見習いの小孩たちは仕事をさぼったり張のことを馬鹿にしたりするが、日本語での書類の作成や通訳をしてもらったりしているため、小孩たちを強く指導することが出来ない。このように、張は日本語が不得意なため大きく不利益を被ってしまう。

作中において、張にとって日本語ができないことによる特に大きな失敗は、電話が用いられた業務で起こる。日本語本位であつたため、例えば「満人同士がおぼつかない日本語で、構内電話にかゝつてゐるなど、滑稽を通り越して悲惨でさへあつた」というような状況があつた。このように電話での情報伝達は困難が伴うようであるが、それが張の大きな業務上の過失の要因になってしまう。

²⁶ 日向伸夫『第八号転轍器』の引用は、日向伸夫『第八号転轍器』(ゆまに書房、2000年)による。

²⁷ 石剛『植民地支配と日本語』三元社、1993年、p. 57。

²⁸ 岡田英樹『文学にみる「満洲国」の位相』研文出版、2000年、p. 167。

²⁹ 川村湊『異郷の昭和文学——「満州」と近代日本』岩波新書、1990年、p. 165。

³⁰ 天野直美「日向伸夫試論——日本人の「満洲文学」の一位相」(『社会文学』1993年7月)、p. 146。

³¹ 魏舒林「〈満洲文学〉のある一面について——日向伸夫の『第八号転轍器』論」(『阪神近代文学研究』2010年5月)、p. 87。

張が責任を問われ、無事故経過日数百日の、輝かしい記録を水泡に帰した罪によつて、点呼の時土下座してみんなに謝らせられた××列車の脱線事故も、矢張り言葉の錯誤が原因だった。下り旅客列車を待避して一時間も停車する筈の××列車が変時刻になつて五分停車で出発することになつたのを、ポイントに通知するのを忘れてみた日本人の常務助役が、発車間際になつてから慌てゝ通知してよこしたのだが、張には急込んで話す相手の日本語が聞き取れなかつた。二度三度聞き返しても矢張解らなかつたが、その上押して聞き返すと、焦立った相手からが一つと頭ごなしに怒鳴りつけられるのが常であつたから、話は解らないまゝに習慣のように、「オーライ」の返事をしてしまつたのだつた。

張は「駅本屋の運転室とポイント小屋を繋ぐ構内電話」によつてポイントの切り替えの指示を受けている。日系の常務助役は通知し忘れていたことを電話で張に伝えようとするのだが、「急込んで話す相手の日本語が聞き取れなかつた」。だからといってあまり聞き返すと、「焦立った相手からが一つと頭ごなしに怒鳴りつけられるのが常であつたから、話は解らないまゝに習慣のやうに、「オーライ」の返事をしてしま」い、列車が脱線するという事故を招いてしまうことになる。満鉄においては、離れた場所にいる駅員同士は電話で連絡を取る必要がある。電話は声を伝達するメディアであるため、電話でのコミュニケーションは対面と比較してより言語に依存しなければならない。身振りなどを伝達することのできない電話では、日本語の不得意な張はより不利な立場に置かれることになる。

そして、今回の人員整理で解雇を覚悟し、もう終わりになるだろうと予感しながらの張の業務における電話の描かれ方は次のようにある。

手をかけると、ゆらゆら揺れる信号機の鉄柱へ、危つかしく上つてどうやら燈を点け終り、もうとつぷり暮れてしまつた線路を、ぼつりぼつり帰つて来ると、作業中遠くに行つてゐてもよく聞こえるやうに、ポイント小屋の軒に取つけた電話のベルが、りんりんとけたたましく鳴つてみた。走つて行つてかゝると、
「××列車出発」
と、列車駅出発の通知だつた。

張は電話で「列車出発」の通知を受けてポイントの切り替え作業を行う。この時の張の心情は「急に胸に蟠る煩悶を吹飛ばして鋭い職業意識が蘇り、張は暗いじけた気持ちを奮ひ立たせる」というようにある。ここに張の仕事の誇りがあり、また長年勤めてきた仕事に対する愛着を見て取ることができよう。しかし、ポイントの切り替えは電話での連絡が不可欠であり、張にとって大きく日本語の問題が関わってくる。つまり、張のアイデンティティともいえるポイントの切り替えという作業はそれ自体としてあるのではなく、不得意な日本語と不可分なものとなつていのである。このような状況において、今回の人員整理での解雇は免れたものの、すぐに次回の人員整理に怯えながら仕事をしていかなければならないという姿は、張の悲惨な現状を強く示している。

日向は「第八号転轍器」について」において次のように述べている。

京都といふ最も日本的な土地に成長し、最も日本的な家庭に育つた自分にとつて、突然放り出された荒蕪の環境と、初めて接触する漢民族とは確かに異常な驚異であつた。日本人一割、満人九割といふ環境の中にあつて、自分は先づ己れに反省する前にその環境を迫及することに専念せねばならなかつた。或る責任あるポストを得たが故に、支配者の優位を保持すると同時に民族協調を考へなければならなかつた。そして所謂文学青年的なセンチメンタリズムと、現実との距離について考へなければならなかつた。そ

してその間に於て絶えず自分が感じ取つたものは、異民族間の人間性と真実といふ問題であり、功利のない世界の美しさであつた³²。

日向は、「現実との距離について考へなければならなかつた」と感じつつも、「異民族間の人間性と真実といふ問題であり、功利のない世界の美しさ」があると述べている。ここには国策的要素を伺うことができるが、実際には日向は異民族間の軋みを感じとっていた。それは、『第八号転轍器』において張が異言語である日本語ができないことによる自身の不利益に対して、諦念を持つしかない姿から伺うことができる。

4. 牛島春子『福寿草』.

本節では、牛島春子の作品を扱っていくが、どのような作家であるのか確認していく³³。

春子は1913年に福岡県久留米市にて、洋品店「帽子屋」を経営する丞太郎・あやめ夫妻の次女として出生する。1927年の14歳の時に小学校の教師をしている兄の盤雄の影響から文学少女となり、処女作『合歓の花』を書く。1929年に久留米高等女学校を卒業し、奈良女子高等師範学校を受験するものの失敗する。その後、兄の影響でマルクス主義に興味を抱き、労働運動に熱意を持つようになる。1931年に久留米の日本足袋の女工となるが、日本労働組合全国協議会との関わりが会社側に知られたため半年で解雇される。この時期に筑後川放水路での集会で牛嶋晴男と知り合う。その後は労働運動に専念し、1932年に共産党に入党する。1933年に逮捕され、1934年に福岡地方裁判所で懲役2年5か月の判決を受け控訴する。1935年に長崎控訴院で懲役2年執行猶予5年の判決となる。1936年に晴男と結婚し満洲国へ渡る。

このような経緯を経て春子の満洲国での生活が始まる。初め晴夫は奉天省属官であったが、1937年に竜江省拝泉県の参事官に任命され拝泉に赴任する。拝泉での生活は春子の作家としての方向性にとって重要だった。この頃に副参事官や警務指導官から討伐隊事故や県城襲撃の話聞き、それらが春子の小説の材料となっている³⁴。

春子の代表作として『祝といふ男』を挙げることができる。この作品は1940年に『満洲新聞』に連載された。第12回芥川賞の候補作となるものの、櫻田常久『平賀源内』に及ばず受賞を逃す。しかし、審査委員の多くは『祝といふ男』に関して言及しているように好評価であったことが伺える。いくつか選評に目を通していくと³⁵、佐藤春夫「新興國満洲の役人社会らしい趣を示し清新の気の漲るもののあるのを敬愛する」、横光利一「荒々しい描写力に新鮮鋭敏な健康さがある」、小島政二郎「異人種の、非常に特殊な性格をこれ程まで見詰めた」、宇野浩二「祝という気色の変った人間の性格がわりに書けている上に満洲国の裏面の或る一面も或る程度まで出ている、好短篇である」というように、『祝といふ男』は一定の評価を受けている。ちなみに、『祝といふ男』は春子作品において最も転載の多いものであるが、それに関しては崔佳琪が詳しく言及している³⁶。

『祝といふ男』は、新しく副県長として赴任した風間真吉とそこの県長弁公署付きの通訳である祝廉天を中心として描かれている。真吉は祝の助けを大きく得ながら、満系警察官の不正を明らかにしたり、軍と村民の間に立って軍馬購買を成功させたりするなど活躍していく。全体として題名にも付けられており、また芥川賞の選評においても言及されているよ

³² 日向伸夫「『第八号転轍器』について」（日向伸夫『辺土旅情』北陵文庫、1943年）、pp. 203-204。

³³ 多田茂治『満洲・重い鎖——牛島春子の昭和史』弦書房、二〇〇九年、二三—二三九頁。

³⁴ 西田勝『近代日本と「満州国」』不二出版、二〇一四年、四四五頁。

³⁵ 櫻田常久、多田裕計『芥川賞全集』三巻、文藝春秋、一九八二年、三三五—三四七頁。

³⁶ 崔佳琪「牛島春子『祝といふ男』の基礎的考察——転載の経過から主人公造型論に及ぶ」（『現代社会文化研究』五二号）。

うに、祝という満系の通訳が印象的である。この祝がどのような人物であるかという次の場面に端的に示されている。

祝廉天はどのような時でも拳銃を肌身につけていた。それを知っている者は真吉以外に、そう沢山はいない。役所では机の抽斗にしまっておき帰る時はまた身につけて帰った。ある時彼は真吉に言った。「満洲国が潰れたら、祝はまっ先にやられますな」半ばはまじめに、半ばはうそぶくような態度だった³⁷。

祝は「満洲国が潰れたら、祝はまっ先にやられますな」と言うが、日系からは「非常に官僚的」で「満系らしからぬ」ということで好まれず、それと同時に満系からは祝が日系的に振舞うことに反感を受ける。このように祝は微妙な位置に自身があることを十分に自覚しているのである。

祝に関して先行研究において度々言及されてきた。川村湊は「日本人よりも日本人化した満州人」であり「まさに“植民地人”の一つの典型」だと述べ³⁸、尹東燦は「まぎれもなく、日本の侵略戦争の犠牲者」³⁹だとしている。支配者と被支配者という構図で捉えた際、祝のように支配者側に付く選択が「“植民地人”の一つの典型」としてある。被支配者側に付くという選択もあるが、いずれの選択にせよ確実に生き残ることが保証されはしないので「日本の侵略戦争の犠牲者」だといえる。この支配と被支配の関係に収まらないものとして、林雪星は祝が通訳という中間的存在であることにより注目し、祝の言動に伝統的中国社会の要素があるなど支配者の一部のみには回収されない点に触れている⁴⁰。また、飯田祐子は真吉の妻のみちに焦点化した部分に着目し、そこには祝のプライベートな側面が語られていることを指摘している⁴¹。他に鄭穎は春子の読書遍歴との関連性を探っている⁴²。このように祝という人物の複雑さが論じられてきた。

春子は異民族を描くことに対して「なるべく陰の部分を書きたかったんです。満洲国万歳ではなくってね」⁴³と述べているが、それが『祝といふ男』では祝の置かれている状況の微妙さや複雑さを通して表現されているのである。しかし、このような祝に対する真吉の理解は不十分である。それは真吉が転任となり祝が別れの挨拶に来る場面から伺える。

「ご栄転おめでとうございます」事務的にそこまで言うと彼は急に黙りこんでじっと立っていた。真吉は目をあげてそれに答えようと祝をみたが、思わず開きかかった口をつぐんでしまった。

一年間ただの一度も見せたことのない祝の顔——弱々しく、哀れみを乞うような姿がそこにあった。(中略)はじめて真吉は祝と温かい人間らしさでふれ合ったように思い、祝をいとおしむ愛情を深々と感じて来た。

真吉は初めて祝の弱々しい姿を目にし、これまでの二人の仕事からお互いの距離が縮まったように感じる。しかし、その後すぐに「祝の目は再び冷たい光を宿し、渾身は体温のない機械のよう」に戻る。二人の間の「いとおしむ愛情」というのはあったとしても一時的なものであり、真吉が転任してしまえばそれはすぐに消えてしまうようなものなのである。

³⁷ 牛島春子『祝といふ男』の引用は、黒川創(編)『〈外地〉の日本語文学選』2巻(新宿書房、1996年)による。

³⁸ 川村湊『異郷の昭和文学——「満州」と近代日本』岩波新書、1990年、p. 157。

³⁹ 尹東燦『「満洲」文学の研究』明石書店、2010年、p. 200。

⁴⁰ 林雪星「牛島春子と「満洲文学」とのかかわりについて」(『跨鏡——日本語文学研究』2号、2015年)。

⁴¹ 飯田祐子『彼女たちの文学』名古屋大学出版、2016年、p. 229。

⁴² 鄭穎「牛島春子「祝といふ男」論」(『城西国際大学日本研究センター紀要』2017年2月)。

⁴³ 川村湊(編)『「戦後」という制度——戦後社会の「起源」を求めて』インパクト出版会、2002年、p. 117。

真吉は満系への理解を示しつつも、満系は「被抑圧者」という立場に起因して「一見陰険にも狡猾にも見える」というように、日系との距離感が存在していることは明確に意識していた。しかし、祝に対しては仕事を通して大きく信頼するようになっていった。ここには少なくとも、真吉側からの満系に対する一定以上の理解の可能性が示されているといえる。ただ、それは『祝といふ男』は県城での平時が舞台であり、真吉が日系であることからの一種の余裕があることとも無関係ではないだろう。それでは、これが非常事の場合はどうであろうか。

1942年に『中央公論』において掲載された『福寿草』では、『祝といふ男』の真吉と同様に満系への理解がある人物として島田浩太郎が描かれている。この作品の大まかなストーリーは、県公署に配置されている日系警察官である島田が、匪襲の遭遇に際して満系警察官たちとともに防衛するというものである。匪襲という危機的な状況において、島田を通して満系はどのように描写されているのだろうか。

島田は普段満系に関してどのように考えているのかというと、例えば孫県長に対しては次のようにある。

孫県長のあの曖昧な微笑の奥にあるものは、日系を信頼している訳ではなく、どうせこんなものとたかを括った満人特有の凶太さと、狡猾さが感じられぬでもなかった。ある者は、孫県長は一種の政治家で、昔からある特別の方法で匪賊と連絡を保ち、付かず離れずの政治をやって一身を守って来たのだ、とまことしやかに噂する者もあつたけれど、真偽のほどは無論判らなかつた⁴⁴。

島田は孫県長に「満人特有の凶太さと、狡猾さ」があるように感じているが、これが島田の満人に対する全体的な評価であるといえよう。また、匪襲の際に島田は妻の澄に「楊は信頼していい」と言うが、ここにも一部を除き全体的には満人への不信感があることが示されている。ただし、これは『祝といふ男』の真吉が感じるのと同様に満系が「被抑圧者」という立場であるから必然といえよう。それと同時に、島田は「奇妙に満人達から好かれ尊敬される男」や「温情主義」だと評価されているように、満系への理解が一定程度あることが伺える。

匪襲以降に目を向けると、島田は孫県長に「衣服を改めて出て来た孫県長の態度は、日本の武士のたしなみに通ずるものにも感じられて立派」だと感じるように変化が伺える。そして、最終的に救援隊がやって来て防衛は成功するが、その時に次のような描写がされている。

命が、もう自分のものであって自分のものではなかつた。一つ一つが民族の高い命に帰一され、民族の命と命がはじめてこの瞬間に手を握り合ったように思われた。百の理論をとびこえて日本人と満洲人とが本当に運命共同体であつた。

ここでは「一つ一つが民族の高い命に帰一され」、「日本人と満洲人とが本当に運命共同体」のようであったと表現されている。日系警察官と満系警察官が協力をして県公署を匪襲から防衛することができたという点では「運命共同体」だったと捉えることができる。

しかし、匪襲という危機に面して島田は満系と本当に「運命共同体」になっていたのかというと、必ずしもそうだとは言えない。それが顕著なのは、島田が攻防の最中満系警察官に声を掛ける場面である。攻防において匪賊は「参事官と指導者を殺せ。無益の手向をやめて我々につけ」と言うのに対して、満系警察官は「何をぬかすか。喋べる口の穴に弾を喰わすぞ」と応酬する。この両者のやりとりに対して、指揮をする島田は次のような感情を抱く。

後から「やれ、やれ」とけしかけていた島田浩太郎は、その時ふっとその中に日本人が入って行けないものにちんと突きあたり、何とも言えぬ孤独感のようなものに襲わ

⁴⁴ 牛島春子『福寿草』の引用は、『牛島春子作品集』（ゆまに書房、2001年）による。

れた。それは射ち合う同士が「満洲語」で悪口を叩きあっている。つまり、敵ながら同族であるという一種の気易さが、無意識の内に働いているのではないだろうか。土壇場に来れば日本人は殺される以外に途はないけれど、警士達は手を挙げればあるいは助かることが出来るのだ。思想的によく訓練された共産匪は、そういう寛大さを同族には屢々示すのである。

島田は、満系警察官と匪賊とが満語で応酬し合っていることに対して、その間に日系である自分が割って入ってはいけないと感じる。島田にとって味方である筈の満系警察官と匪賊の持つ言葉が同じ満語であることに意識が向かざるを得ないのである。「その一種言いようのない孤立感は誰れの胸にも来たらしかった」とあるように、島田が感じたのと同様のものは日系全体へと波及していく。言語を通して味方同士とはいえ日系と満系との民族的差異が根底にはあるということに恐怖感を抱くことになる。

そして、この作品は戦闘の経過と同時に、近隣から援軍の要請をするために電話の接続の試みが行われている。匪襲を受けた当初から電線が切断されているため繋がらなかった。その後、何度も試みるもののなかなか電話は繋がらず、防衛はもう不可能かと思われた時ようやく繋がる。

「もし、もし、もしもし」島田浩太郎は思わず腰を浮かせて、せき込んで呼んだ。交換室に通じ、出たのは隣の県境にある小さいな分駐所で、まぎれもない日系指導官の声であった。

電話から聞こえるのは、「まぎれもない日系指導官の声であった」とある。先述したように、島田にとって同じく県公署を守備している満系警察官は味方ではあるものの、敵である匪賊と同じ言語を持っている存在である。島田は戦闘の最中にありながら、満系警察官は味方であり同じ場所にいるにも関わらず、言語の差異により距離感を抱いてしまうのである。そのため、島田が電話で外部に助けを求めるのは防衛を成功させるために必要なことであるが、それと同時に同じ母語を持つ日系を求めていたと捉えることができよう。日系にとっていざという際に信頼できるのはやはり日系であり、離れていても電話によって空間的に繋がることができるというのは身を守る手段となっている。それは日系同士の電話により形成される空間が、同じ場所にいる満系たちよりも優先されていると見なせよう。

『福寿草』には「この貧しい作品を建国以来治安工作につくされた日系警察官に贈る」という題辞が付されているが、これに対して後に春子は「満洲建国十周年記念ということで(中略)不本意なことを付け加えたような気がします、そんな記憶があります」⁴⁵と語っている。『福寿草』は満洲建国10周年記念の際に『中央公論』に発表された作品であり、したがってそこには「百の理論をとびこえて日本人と満洲人とが本当に運命共同体」といった表現が挿入されるなど国策的な要素は介在してくる。しかし、島田が満系警察官に対して抱いたことや電話での応援要請などの場面から考えると、民族的差異の問題が通底していることは明白である。そのため、最後の日系と満系が「運命共同体」であったというような描写には虚しさを禁じ得ない。『祝といふ男』では県城の平時における異民族間の問題が描かれているが、『福寿草』では有事におけるそれが描かれている。危機的な状況において島田が抱く満系への距離感、それは『祝といふ男』とはまた異なる形で日系と満系との軋みが強く示されているのである。

5.おわりに.

電話網の発達は遠くにいる者同士を空間的に接続することに役立ってきた。それは支配する地域を拡大しても、速やかに連絡を取ることを可能にしたということである。日本は電

⁴⁵ 注43に同じ、p. 112。

話を敷設することで、満洲国や外地との連絡をより容易なものとし、それによって空間的距離の短縮と帝国の一環であるという意識を強めていくのである。

それに対して、満洲国内における電話に目を向けると言語の問題があることが伺える。満洲国には異なる民族がいるため異なる言語が存在する。そして、電話は声のメディアという言語的要素の大きいものである。そのため、電話には言語の差異といった問題が介在してくるのであり、それが満洲国における電話を考える際に重要になってくる。

本稿で扱った日向と春子の作品には、日系と満系との間の埋め難い距離感の存在が通底している。『第八号転轍器』において、満鉄に勤める張は列車のポイントの切り替え業務を行っている。これは張にとって長年勤めて来た誇りや愛着があるものだ。しかし、その業務は電話での連絡が不可欠であり、日本語という異言語の問題が大きく関わってくるものであった。『福寿草』では、匪襲という危機に際して、真吉は遠くに離れている日系を電話で求める姿が描かれている。それは単に防衛を成功させるためだけのものだとは伺えない。匪賊と味方の満系警察官は同民族であり同言語を持つのに対して、真吉たち日系は異民族である。それを強く意識せざるを得ない状況が真吉を通して描かれている。

電話網の拡大は離れた場所同士を接続し、満洲国や外地と内地との帝国意識の形成に寄与していた。しかし、満洲国内において電話がどのように機能していたのかというと、日向と春子の作品から伺えるように、接続よりも日系と満系との差異を意識化させるものとしてあった。電話は声のメディアであるので、言語の差異が顕著に表れ、そしてそれは民族的差異を意識させることに繋がる。そのため、『第八号転轍器』と『福寿草』では電話が民族的差異を示すものとして描かれている。同じ声のメディアであるラジオは満洲国内における民族間の分断に寄与していたが、マスメディアと比べて伝達内容が個人に依存するパーソナルメディアの電話であっても、そこには民族的差異が濃厚に表れるのである。